



Title	近代中国思想史の研究：伝統思想から近代思想への展開
Author(s)	河田, 悅一
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57874">https://hdl.handle.net/11094/57874</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【50】

氏 名	かわ た てい 一
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学 位 記 番 号	第 23427 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 11 月 10 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 论 文 名	近代中国思想史の研究——伝統思想から近代思想への展開
論 文 審 査 委 員 (主査)	教 授 湯浅 邦弘
(副査)	教 授 片山 剛 教 授 高橋 文治
	名古屋大学名誉教授 竹内 弘行

#### 論文内容の要旨

本論文は、18世紀の乾隆帝・嘉慶帝期（いわゆる乾嘉時代）から20世紀の社会主义中国まで、約300年にわたる中国の思想史を、「伝統思想」から「近代思想」への展開として描き出す論考である。全体は、序文に続いて全11章からなり、400字詰原稿用紙換算で870枚の大作である。

第一章「清代学術の一侧面—朱筠、邵晋涵、洪亮吉、そして章学誠一」、第二章「乾嘉の士大夫と考証学—袁枚、孫星衍、戴震そして章学誠一」では、旧体制の中国を維持してきた儒教、その最後の学風と言うべき「考証学」の時代における学術的状況を明らかにする。乾嘉時代の代表的思想家である章学誠を中心として、その人間像と学問的交流を追跡し、儒教經典の文献研究から、真理を追求した「实事求是」の時代精神を明らかにする。

第三章「同時代の眼—章学誠の戴震観一」、第四章「清末の戴震像—劉師培の場合一」では、乾嘉時代において章学誠と双璧をなした戴震を取り上げる。そして、戴震が文字→言語→真理と、儒教經典に依拠して古代の文字研究を演繹的に続けていく中から、儒教の

精神、哲学的意義を究明する新しい風氣を拓いた思想家であり、また清朝への抵抗の意識と姿勢を持った反骨の氣概ある学者であったことを明らかにする。

第五章「否定の思想家・章炳麟」では、戊戌変法、義和団事件、辛亥革命へと至る大転換期を生きた章炳麟を「否定の思想家」と規定し、その共和思想、反帝国主義思想、反近代主義思想、反封建主義思想を取り上げて、伝統思想と近代思想との格闘の過程をたどる。

第六章「孫文の文明観そして儒教」では、孫文の「文明」「文化」観を探るとともに、これまでほとんど論じられたことのない孫文の「儒教」評価を解明する。

第七章「啓蒙的知識人・陳獨秀」では、現代中国の原点とも言うべき五四運動期の思想の代表として、陳獨秀を取り上げる。北京大学の教授であり、中国共産党の初代書記長でもあった啓蒙的知識人陳獨秀が、中国の伝統思想・伝統文化を封建的として徹底的に否定し、西欧思想・西欧文化をモデルとして近代中国を形成しようとした、また挫折した軌跡を明らかにする。

第八章「李大釗の時間論」は、同じく北京大学教授であった李大釗を取り上げる。李大釗の時間論と空間論を分析しつつ、儒教を主軸とする価値世界が崩壊し、共和制の運営が不安定な民国初期において、人はいかなる存在であり、いかに行動していったらよいのかという問題を李大釗が根元的に追究しようとしたことを明らかにする。

第九章「胡適と国故整理と戴震評価—近代的学術研究の成立について—」は、從来中国大陆で「反動的知識人」として否定的に取り扱われてきた胡適の「国故整理」運動を実証的に再評価し、近代的学術研究の成立に関して胡適がどのように貢献したのかを考察する。

第十章「伝統から近代への模索—梁漱溟と毛沢東—」は、梁漱溟を取り上げ、同年齢の毛沢東と対比する。伝統的な儒教思想に依拠し、独自の郷村建設理論を実践した梁漱溟と、マルクス主義の立場から独特の農民運動を開拓した毛沢東とを対比し、彼らの交流と強烈な自我の衝突を追跡する。

最後の第十一章「現代中国と孔子」では、儒教が現代中国においてどう評価されてきたのかという問題を、特に中華人民共和国建国以後、文化大革命までの孔子評価を探ることによって明らかにする。

#### 論文審査の結果の要旨

中国思想史研究には、大きく言えば二つの山がある。一つは、古代中国思想史の研究であり、いわゆる諸子百家の時代から漢代までがその主対象である。今ひとつは、朱子や王陽明を中心とする、いわゆる宋明学であり、これに加えて道教・仏教研究もある。

しかし、忘れてはならないもう一つの山として、近代中国思想史をあげなければならぬであろう。だが、この時期の思想史に関する研究は、時代が近くてその時どきの政治的動向に左右されることが多く、清朝考証学に対する実証的研究が比較的その影響を受けることが少ない他は、歴史的評価に耐える研究は多くはない。さらに、この時期の取り上げるべき思想家や事件があまりにも多く、また時代の転変が大きすぎて、通史的論考が困難であった。

そうした中で、本論文は、従来の近代思想史の枠を大きく広げて、清朝考証学の全盛時代に登場し、その学問振興を支えたパトロン朱筠、そのもとで考証学に哲学的批判を加えた独創的思想家の章学誠から現代の中国に至るまで、およそ300年の歴史を、実証的に跡づけようとする。主要な思想家や思想運動は、ほぼ取り上げられており、その構想力や視野の広さは見事である。また、これまで伝統思想と近代思想との間を対立的に見たり、断絶したものとする見方が多いのに対して、本論文は、伝統思想と近代思想との対立・継承がさまざまなドラマを生みながら展開していく様相を具体的に明らかにする。その過程では、資料に語らせる実証的手法に加えて、常に複数の思想家を対比的に検討し、それぞれの人物像を明確に描写した上で、その人物の思想的特質を浮かび上がらせるという独創的な手法を貫いている。さらに、現代中国においても、伝統思想が今なお生命力を持って存在している状況を解明し、将来における伝統思想存続の可能性を展望する。

ただ、本論文では、個々の章の論述に意識を費やし過ぎたためか、学説史や先行研究との関係を論じた総論的な章が不足している観を否めない。また、全体あるいは各章における伝統思想（儒教）の分析や定義がもう少し欲しいところであった。さらに、細かなことではあるが、原文の引用の原則が一貫していないなど、若干の問題も見受けられる。

とは言え、本論文は、中国近代思想史について、独自の切り口から総合的な通史を記述した力作であり、タイトルにある「近代」を超えて、「現代」までを描き出した大作である。突出した研究成果をあげていると評価できよう。よって、本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。